

また、我が家では子どもの現地校での英語や社会の勉強を、キンダー以降はサポートできませんでしたし、家庭教師をつけた経験ありません。現地校の勉強は子どもが自分でがんばるしかなかったのです。しかし、教科書を読めば分かる現地校の勉強は、言葉は異なるけれども日本語の「読み聞かせ」を通して身につけた読書習慣が武器となって、乗り越えられたと思います。

皆さんが表現力豊かな日本語で読み聞かせることの効果は、言葉を超えて、子どもの知的発達に表れてきます。そして、お母さんの毎日の努力は、子どもが成長した時に、必ず報われます。

日本語で遊びを覚えさせる。

3人娘が、英語で「ままごと」をしているのを見つけました。「だって、日本語でどう言えばいいか、知らないもん。」子どもが正しい！そこで、我が奥様が嫌がるのを無理にお願いして、日本語で一緒にままごと遊びをしてもらいました。1週間後には、近所の外国人の子どもを集めて、日本語でままごとをしていました。(ヤッタ！)

子どもや兄弟・姉妹の会話に、家庭内で英語が入ってくるのは、遊びの言葉から始まります。日本語で一緒に遊び、遊び方を見せてやることで、楽しく日本語が定着します。

一人っ子のお母さん、がんばりましょう。

百人一首

もう一つ、我が家では家族が全員揃うと「百人一首」をします。我が家のこの習慣は、中学生の長女に日本の親戚が「百人一首」を送ってきてくれたことで始まりました。

はじめは、まだ小学生の妹達も「ひらがなが読めれば取れるよ」といわれて、意味も分からずに参加していました。もちろん、「坊主めくり」で「お坊さんがたくさんいるね」「これが十二単って言うんだ」などと、目で見ての知識も増えていきます。お父さんの上手な(?)読み上げを聞いて「五七調」のリズムに親しんでいきました。「これどういう意味」と疑問が出て和歌の意味も少しずつ理解できるようになり、憶える一首も増えてきました。自分の好きな和歌や作者さえ出てきました。

何年も続けている間に、古典の世界に興味を持つようになりました。その興味は、現地校でも学ぶ俳句や短歌に移り、最後には、新作の歌舞伎のビデオを家族で鑑賞、ということになりました。日本語の単語力の向上が、また子どもなりの日本文化の理解が、日本固有の遊びからスタートします。

親子の会話

我が家のお父さん(私)は、話好きです。さらに、家族揃って食卓に着くと、お父さんが「席を立ててもいいよ」というまで、子どもたちは付き合います。(これは、子ども達がアメリカナイズしてきたお蔭です。)

日曜日、家族揃って朝食を取ることがあると、「話好き」と「アメリカの習慣」の組み合わせが、最大の効果を発揮します。家族揃っての会話が2・3時間続くからです。

「最近どうしてる？」などという日常会話で始まりますが、日本の家族の話から、日本社会の問題点、アメリカの大統領の話と、お父さんのペースで話題が広がります。時には、議論になり、日本的思考の塊である父親と母親を、論理的な思考や表現に優れた(?)子ども達が「もうそれ以上、いえないでしょう。」と打ち負かすこともあります。この時の言葉は日本語です。しかし、子ども達から、日本語の訳語が分からないので、英語の単語がそのまま出てくることもしばしばあります。そんな時、「日本語ではXXって言うんだよ」と父母は溜飲を下げます。

たいていは、末娘の「もう立ってもいいでしょう!」という一言で、長かった日曜日の朝食が終わります。

この会話のスタイルは、アメリカ的かも知れません。しかし、日本語での会話、話題を通して、子ども達は言葉以上のものを吸収します。



いかがだったでしょうか？

我が子の日本語習得の為に、家庭内で作ってきた日本語環境・仕掛けを、思いつくままに紹介してみました。



ちなみに、我が家の3人娘は、誰も日本に6ヶ月以上住んだことはありません。現在、アメリカで学んだり、働いたりしています。家内と二人でうらやむほどの、バイリンガル・バイカルチャーです。

こんな話をする、自慢話で、成功例で、といわれるか分かりません。しかし、私達夫婦も子育てで、失敗(?)も数えられないほどしてきましたし、本当に悩んだこともありました。

今回は、皆さんがお子さんの子育て・教育を前向きに考えていただきたい。そんな気持ちで、我が家の例を紹介させていただきました。

実は、このコラムは本誌12号(2007年1・2月号)に加筆訂正したものです。
ご質問に答えたくて、もう一度掲載させていただきました。お許しを。